



災害リスクに適応できる社会の確立へ 将来の為に今行動を起こすことが私達の責務

国連大学サステナビリティ高等研究所 (UNU-IAS) リサーチ・アソシエイト

ジュリア・ロデル (Giulia Roder)

水の研究へ進むきっかけとなった 故郷での洪水被害

私はUNU-IASで、「持続可能な開発のための水」(Water for Sustainable Development: WSD) というプロジェクトで研究をしています。人間の経済・社会活動にとって欠かせない資源である水を、持続可能な形で確保することは、SDGsにおいても重要なゴールの1つです。WSDは、アジア太平洋地域の地方都市でケーススタディをおこない、経済・社会・環境において水が果たす役割、影響などについて総合的に評価する研究をおこなっています。

私が水に関する研究に進もうと思ったきっかけは、2010年に故郷イタリアのヴェネトで体験した大規模な洪水被害です。氾濫した川のそばで一週間生活し、ようやく救助された時の安堵感は忘れられません。それ以来、水が私たちの生活にもたらすリスクについて考えるようになりました。

災害のリスクを回避し、適応できる社会構築のためには、水資源や災害に関する行政体制の改革が必要です。特に、関連組織の連携、コミュニティとの対話の機会、地域の特性を反映させることが重要です。この変革の過程において、研究者が貢献できることは大きいと感じており、それが私の研究の原動力です。



インド集落での持続可能な開発や水についての調査

日本の防災対策から学ぶこと

博士課程を終え、自分を大きく成長させてくれる場を探る中で、日本で研究活動をする機会を得ました。もともと日本の文化や慣習、高度な技術には関心がありましたが、特に日本の防災対策からは多くを学んでいます。防災への投資、インフラ整備、早期警戒システム、メディアでの災害報道、人々の防災意識など、世界の手本となるような事例が多くあります。

また来日して驚いたのは、持続可能な社会の実現に向けた啓発活動や、参加型のイベントが多く開催されていることです。特に東京には、個人レベル、社会レベルで変革を強く望む人々が集まっていることに感銘を受け、私も積極的にイベントに参加しています。

地球を犠牲にせず、責任感を持って 誠実に向き合う社会へ

サステナビリティ(持続可能性)を考える上で大事な視点に経済・環境・社会がありますが、重要なのは自然環境との調和の上に、私たちの健康の維持や経済の安定が成り立つということです。かつてコフィ・アナン元国連事務総長が語ったように、将来起こるかもしれない災害に備える社会体制を確立するのは容易ではありません。防災への投資や取り組みの効果や利益は、すぐに目に見えて実感出来るものでないことが多いからです。でも、将来のために今行動を起こす事こそが私たちが負っている責務であり、「持続可能な社会」という言葉が真に意味することだと考えています。私にとって「持続可能な社会」とは、地球を犠牲にせず、責任感を持って誠実に向き合う社会です。



ジュリア・ロデル

パドヴァ大学で博士号(環境・土壌・資源・衛生)、修士号(森林環境科学)、学士号(森林環境テクノロジー)を取得。2019年4月からUNU-IASのリサーチ・アソシエイトとして研究活動に従事している。国籍はイタリア。